

ヨハネの福音書 (46)
「世にある証し人の生き方」
ヨハ 15 : 18~16 : 4

1. 文脈の確認

(3) イエスの私的奉仕 (13 : 1~17 : 26)

①最後の晩餐 (13 : 1~30)

②階上の間の説教 (13 : 31~16 : 33)

*ぶどうの木にとどまる人生 (15 : 1~10)

*友とされた者の生き方 (15 : 11~17)

*世にある証し人の生き方 (15 : 18~16 : 4)

2. 注目すべき点

(1) 十字架にかかる前夜、弟子たちに厳しい現実が告げられる。

(2) 迫害が襲うが、主からの助けも用意される。

(3) 今日の信者への適用が多く含まれる。

3. アウトライン

(1) 世の憎しみを覚悟せよ (15 : 18~21)

(2) 世の罪は暴かれることを知れ (15 : 22~25)

(3) 御霊とともに証しせよ (15 : 26~16 : 4)

4. 結論：今日の信者への適用

クリスチャンは、この世にあってキリストを証しすることができる。

I. 世の憎しみを覚悟せよ (15 : 18~21)

1. 18 節

Joh 15:18 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。

(1) ヨハネの福音書の「世」とは何か。

①ギリシア語で「コスモス」という。

*宇宙 (被造世界)、地の住人 (人類)、神に敵対する組織化された社会

②ここでの「世」とは、第3番目の意味である。

③サタンの支配下に置かれている。

④ヨハ 14 : 30

Joh 14:30 わたしはもう、あなたがたに多くを話しません。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることができません。

(2) 神の友である人は、この世から見たら「敵」である。

①この世と調子を合わせることは、神の敵になることである。

②ヤコ 4 : 4

Jas 4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。

(3) 世の憎しみに遭ったとき、思いがけないことが起こったと思うべきではない。

①イエス自身が、先に世の憎しみを経験している。

②幼子イエスは、ヘロデ大王に殺されそうになった。

③今は、十字架につけられようとしている。

④迫害は、仮定のことではない。イエスに従う者は、迫害に遭う。

2. 19 節

Joh 15:19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。

(1) この世が信者を憎むのは、信者に対して異質なものを感じるからである。

①信者は、闇の王国から解放され、神の王国に移された。

②信者は、新しい喜び、目的、希望、愛を見出した。

③信者は、この世の人たちとは異なったライフスタイルを持っている。

④信者は、この世にしながら、この世のものではない。

⑤信者は、霊的に新しいアイデンティティを持つようになった。

(2) 世は、自分たちと同質なものを愛する。

①粗暴なことば（日常会話、ネット上の書き込み）

②肉欲

③教養ある人であっても、自分のためにだけ生きている。

④SNS 文化、個人主義、快楽主義

(3) 信者はイエスによって選ばれた人たちである。

①信者は、その生き方を通してこの世の人たちを裁く。

②それゆえ、この世の人たちは信者を憎むのである。

3. 20~21 節

Joh 15:20 しもべは主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。

Joh 15:21 しかし彼らは、これらのことをすべて、わたしの名のゆえにあなたがたに対して行います。わたしを遣わされた方を知らないからです。

(1) 「しもべは主人にまさるものではない」 (ヨハ 13 : 16 の教え)

①信者は、主イエスに倣って「しもべ」となる必要がある。

②この教えには、別の適用がある。

* イエスを憎む者は、弟子たちをも憎む。

(2) この世の人たちが信者を迫害する理由

①イエスを遣わした父なる神を知らないので、イエスを憎む。

②イエスへの憎しみを、弟子たちに向ける。

③彼らに対して怒りではなく、憐みの心を持つ。

II. 世の罪は暴かれることを知れ (15 : 22~25)

1. 22~23 節

Joh 15:22 もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今では、彼らの罪について弁解の余地はありません。

Joh 15:23 わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいます。

(1) イエスが到来する前と後の違い

①到来する前なら、まだ弁解の余地があった (無知を言い訳にできた)。

* 「罪はない」とは、無罪だということではなく、罪の度合いの問題である。

* 啓示の量が増えると、倫理的責任も増える。

②到来して以降は、弁解の余地はない。

* イエスは神のことばを語り、メシア性を証明する奇跡を行われた。

* イエスにはなんの罪もなかった。

* にもかかわらず、彼らはイエスを信じなかった。

(2) 主イエスは、父なる神を啓示するために来られた。

①イエスを憎む者は、父なる神をも憎む者である。

5. 24~25 節

Joh 15:24 もしわたしが、ほかのだれも行っただけのわがや、彼らの間で行わなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今や、彼らはそのわがやを見て、そのうえでわたしとわたしの父を憎みました。

Joh 15:25 これは、『彼らはゆえもなくわたしを憎んだ』と、彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。

(1) これは、22~23 節の詳細な説明である。

- ①イエスは、多くの奇跡を行い、ご自身のメシア性を証明された。
- ②しかし、イスラエルの民は光よりも闇を愛したので、イエスを拒否した。
- ③ニコデモの応答は、例外的なものである。

(2) 罪というのは、基本的に非理性的で、理屈に合わないものである。

- ①公の場でのクリスマス拒否
- ②彼らの不信仰は、旧約聖書に預言されていた。
- ③ダビデによる預言（義人の嘆き）

Psa 69:4 ゆえなく私を憎む者は／私の髪の毛よりも多く／私を滅ぼそうとする者／私の敵偽り者は強いのです。／私は 奪わなかった物さえ／返さなければならぬのですか。

④詩 35 : 19、109 : 3 など参照

Ⅲ. 御霊とともに証しせよ (15 : 26~16 : 4)

1. 26~27 節

Joh 15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいます。

Joh 15:27 あなたがたも証しします。初めからわたしと一緒にいたからです。

(1) 弟子たちへの励ましのことば

- ①弟子たちは、イエスについて証しする。
- ②御霊は、弟子たちを通して働く。
- ③御霊の働きは、単なる慰めではなく、イエスを証言する宣教的役割である。

(2) 三位一体の働きの一致

- ①父から出て、子によって遣わされる御霊
- ②三位の神が協業して、救いと証しの業を進める。

(3) 使徒たちの証しは「歴史的・目撃的」。

- ①使徒たちは、イエスの生涯をともに歩んだ証人である。
- ②その証言は、信仰の土台である。

③使徒的証言は、新約聖書の信頼性と権威の根拠でもある。

2. 1～2 節

Joh 16:1 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまづくことのないためです。

Joh 16:2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。

(1) 迫害の予告をする理由

- ①つまづくことがないためである。
- ②弟子たちは、メシア的王国の希望を持っていた。
- ③イエスの死と復活の後に起こることは、想定外のことである。
- ④しかし、苦難は当然のこととして受け止めるべきである。

(2) 迫害の内容

①会堂からの追放

- * ユダヤ人にとっては、最悪の悲劇である。
- * ユダヤ人共同体からの追放である。
- * 紀元 85 年から 90 年の間に、会堂での祈りに変化があった。
- * 「シュモネ・エスレ」という伝統的な祈り
- * 元来は 18 の祈りから成っていたが、第 19 番目が追加された。
- * それは、メシアニックジューを追い出すための祈りである。

「背教者からすべての希望を取り去りたまえ。分派を作る者は、直ちに滅ぶべし」

②殉教の死

- * ステパノ (使 7 章)
- * ヤコブ (使 12 章)
- * サウロによる迫害 (使 9 章)

(3) 迫害の理由は、それが神への奉仕だと誤解していること。

- ①サウロがその例である。

3. 3～4 節

Joh 16:3 彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。

Joh 16:4 これらのことをあなたがたに話したのは、その時が来たとき、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。／わたしは初めからこれらのことを話すことはしませんでした。それはあなたがたとともにいたからです。

- (1) 迫害の根本的な理由は、父なる神を知らないことである。
 - ①父を知らない人は、イエスをも知らない。
 - ②イエスを知らない人は、イエスの弟子たちの教えを受け入れない。
- (2) イエスが迫害を予告した理由は、弟子たちがそれを思い出すためである。
 - ①これまでイエスは迫害について語ってこなかった。
 - ②この世の憎しみは、イエスに向けられていた。
 - ③イエスがいなくなると、イエスの地上におけるからだである教会が誕生する。
 - ④この世は、イエスのからだである教会を憎むようになる。

結論：今日の信者への適用

- 1. クリスマンは、世と対立する覚悟が必要である。
 - (1) 聖書的価値観に立てば立つほど、世的価値観とのギャップは広がる。
 - (2) 神の恵みによる選びは、世との決定的断絶を意味する。
 - (3) 嫌われることを嘆くよりも、主と同じ歩みをしていることを誇ろう。
- 2. 敵意の背後には、霊的無知があることを知ろう。
 - (1) 迫害は、世がキリストを知らないがゆえに起こる。
 - (2) 相手を裁く前に、憐れみと祈りの心をもって接しよう。
 - (3) 私たちもかつてはそのような者であった。
- 3. 真理を語る者は、罪を暴くがゆえに憎まれることを知ろう。
 - (1) 聖書の真理は、人の罪を照らす。
 - (2) それに反発があるのは自然な反応である。
 - (3) クリスマンの存在そのものが「光」である。
- 4. 真理を語る者には、御霊の助けがある。
 - (1) 迫害される者が、御霊によって証し人とされる。
 - (2) 聖霊は常に、証しの場において信者を助け、語らせてくださる。
 - (3) 自分の力に頼るのではなく、御霊への信頼に立って証ししよう。